

(9) 附属幼稚園

ア 設置の趣旨（目的）及び組織

i) 本園の任務

- a 教育基本法，学校教育法等に基づき幼児を保育し，適当な環境を与えて，その心身の発達を助長するとともに，保育に関する研究を行う。
- b 学部学生及び大学院学生の実地教育，実地研究に協力し指導に当たる。
- c 大学及び附属小・中学校と連携し，教育理論及び実践に関する研究を行う。
- d 地域社会における幼児教育の振興に寄与する。

ii) 組織

附属幼稚園は，園長，副園長，教諭3人，養護教諭，非常勤講師2人，教育補佐員（特別教育支援員），教育補佐員，事務補佐員により構成される。

iii) 教育目標

「元気な子ども やさしい子ども 考える子ども」

イ 運営・活動の状況

i) 教育研究・管理運営の状況

a 教育課程改善研究の推進

文部科学省研究開発学校の指定を受けた幼小接続に関する研究を終え，平成25年度から新たなテーマで3年計画の研究を開始した。今年度は，研究3年目に当たる。

1) 研究主題

「遊び込む子ども」（3／3年次）～学びの基盤に着目して～

2) 研究目的と内容

幼児教育に携わる者にとって馴染みのある「遊び込む」という言葉について，子どものその姿について深く掘り下げていく。1年目は，保育者が幼児の遊び姿に何を見出したときに「遊び込んでいる」と感じるのか，イメージや感覚のレベルを超えて「遊び込む」姿を捉え，2年目は，遊び込むための環境や教師の援助を探り，3年目は，遊び込んだ子どもの育ちを探った。

3年目の今年度も，日々の遊びを振り返り，遊び込んだ事例の集積を行った。また，3年間蓄積してきた事例をもとに，現5歳クラスの幼児の育ちを探った。すると，幼児は遊び込んでいるときに，普段とは違う姿を見せることが分かった。そこで，事例としてまとめる際には，その遊びに加わっていた幼児の普段の姿と遊び込んでいるときの姿を比較した。結果，幼児が遊び込み，遊びがどんどん発展していくとき，独特な雰囲気に含まれることが分かり，それを「遊び込みの空気」と名付けた。「遊び込みの空気」に含まれて遊ぶことで，普段はできないことができたり，よいところがさらに伸びたりしていることが分かった。そして，「遊び込みの空気」に触れて変化することを積み重ねた幼児には，「がんばる力」「かんがえる力」「よりよくかかわる力」「ことばの力」が育まれるのではないかということが見えてきた。

3) 平成27年度教育研究会の開催（第23回幼児教育研究会 10月7日）

幼稚園・保育園に加え小学校や教育行政関係者からも大勢の参加者があり，総勢295人の参加が得られた。

午前中の公開保育では、保育室、遊戯室、出会いの広場などの屋内空間と、園庭や園舎周りの屋外空間の様々な場所で、仲間とかかわり、自己発揮しながら活発に遊ぶ幼児の姿を公開することができた。参会者からは遊びにのめり込む様子について高い評価をいただいた。

研究発表では、幼稚園や保育園現場の方から、「遊び込みの空気」という言葉が、保育者として実感を伴って理解できるという評価を得た。また、幼児と一緒に担任も遊び込みの空気の中に身を置くことで子ども観や保育観に変化が現れたという発表には、保育者の成長が表れており、とても分かりやすく好感が持てるという感想をたくさんいただいた。

午後は、3つの会場に分かれ、3、4、5歳クラスそれぞれの「遊び込む」様子について詳しい事例を説明した後、来年度以降の研究に向けて、遊ぶことによって育まれる力について話し合った。幼稚園教諭、小学校教諭、保育士、行政関係者、研究者等、各々の立場から意見交換を行うことができた。その後、東京大学大学院教授の秋田喜代美先生から「遊び込む子どもたちを育てる保育」と題してご講演をいただいた。

4) 研究紀要の刊行

年度末3月に平成27年度研究紀要『遊び込む子ども一学びの基盤に着目して—vol. 3』を刊行した。

今年度は、3年間蓄積してきた遊び込んだ事例をもとに、遊び込むことによる幼児の育ちを探ることに取り組んだ。遊び込むことによって、小学校からの学びの基盤となる「がんばる力」「かんがえる力」「よりよくかかわる力」「ことばの力」が育まれるのではないかとの示唆を得て、紀要に示した。

b 管理運営の状況

1) 教職員や保護者等による学校評価を生かした学校運営改善の取組

年度始めにランドデザインを作成・確認し、1月には保護者と教職員による学校評価を行った。学校評議員会を平成27年5月20日及び平成28年2月24日に開催した。保育や研究の成果及び学校評価の結果を示し協議を行うとともに、当園の課題と今後の取組について提案し、意見をいただいた。また、評価結果は学校評議員会での意見を加えたものを3月1日開催のPTA総会で保護者に公表し、次年度の改善に反映させた。

2) 教育環境の整備と安全管理の徹底

幼児の豊かな体験の場として充実した環境となるように、毎月全職員が園庭等の安全点検や・整備作業等を行った。また、幼児の遊びが一層充実するよう、今年度も緑の小道内のこども広場に、ブランコやスラックライン等を保護者ボランティアから設置してもらった。園庭では、幼児が自由な発想で遊べるよう、雨どいやすりばち、ままごと道具などを用意し、自由に使えるようにしている。

3) 安全確保の取組

警察や消防署の協力を得て、火災、地震、不審者侵入等を想定した避難訓練を年6回実施した。特に東日本大震災の教訓を踏まえ、地震の震度に合わせた対応などを徹底し、訓練を実施した。防災に関し、保護者向け緊急連絡メール配信システムを継続するとともに、地震に関する申し合わせを保護者に徹底した。また、保育環境の安全確保に向けた、環境整備日・安全点検日は毎週定期的に設けている。

さらに、PTA交通安全委員が、寸劇で幼児達に事故防止を印象づけたり、外部講師を招いて幼児に防犯や交通安全の重要性を訴える会を開催し、日常生活に生かされる研修となった。

4) 本園の魅力に関する調査結果に基づいた積極的なPR活動等

保護者アンケートにおいて、ほとんどの保護者が教育の質のよさに満足している結果を踏まえ、教

育のよさをパンフレット配布や地域TVのCM放映，園開放デー等実施により積極的にPRした。園庭開放は，前年に引き続き毎週木曜日開催とし，年間31回実施した。総利用者数は700人を超え，未就園児の総利用者数は80人以上であった。さらにPRに努める。

年間を通じ，園のホームページとフェイスブックにより，常時，幼児の様子やPTA活動の様子を発信した。

ii) 附属幼稚園の活性化・充実のための取組

a 保育の充実を図る取組の推進

- 1) 毎日の終礼時における情報交換，幼児の遊んだ跡の様子を見ながら話し合う「保育を語る会」や研究推進委員会（週2回）などを通して，保育改善や研修に継続的に取り組んだ。
- 2) 幼児教育コース教員や大学教員など園外指導者の協力を得ながら専門的な見地を生かした研究や研修を進め，幼児の学びを見とる力や実践的指導力の向上を図った。前述のように2週に1回は大学教員とビデオカンファレンスを行い，連携がさらに強まった。
- 3) 幼児の学びや育ちについて履歴を集積し，保育や指導計画の改善に生かした。

b 家庭との連携を深める取組の推進

- 1) 登降園時や連絡帳等を活用した情報交換をはじめ各種たより等を通して保護者との連絡を密にした。
- 2) 保育参観日と教育相談日を毎月1回実施。保育参観日には毎回9割近い参加があった。運動会や祖父母参観等の園行事には遠方の親族も多く参加され，幼稚園の理解を深める機会となった。
- 3) 年2回の「ふぞくフォーラム」（保護者対象）を実施し，幼児教育の重要性や園運営について理解を図ることができた。第1回は，園長が専門分野について語り，その後，グループに分かれてディスカッションを行い，保護者が日頃思っていることを互いに理解し合う機会を持つことができた。

2回目は大学を会場に，本学の田島弘司准教授を講師として『『笑いヨガ（ラフターヨガ）』～笑う門には健康と喜びと素敵な人が集まります～』と題し，講演をいただいた。講演では，話題の笑いヨガはどのようなものか，どんな効果があるのかを実践を交えながらお聞きし，笑うことは肉体的・精神的なストレス解消になり，親子の関係をもよくしてくれる等，笑顔の大切さに改めて気付くよい機会となった。

さらに父親・祖父を対象としたフォーラム「パパじじの会」を休日に2回実施した。幼児の育ちや大学との連携についてともに考え理解を深める機会となった。

c 大学・附属校との連携・協力の推進

- 1) 附属小学校1年生の担任との連携を強め，定期的に情報交換を行いながら取組を進めた。幼児と1年生との交流活動を年間を通して4回行い，小学校への接続が円滑に行われるよう，双方向性のある活動展開が可能になるようにした。
- 2) 学部2年生の教育実習と学部4年生等の幼稚園専修教育実習を受け入れた。
- 3) 幼児教育コース教員と協議会を行い，研究や運営等の課題について協議した。
- 4) 大学教員や英語教育専攻の学部生・院生の協力を得て，年長児を対象とした英語活動を毎月実施した。
- 5) 特別支援教育コース並びに同実践研究センターと連携し，幼児の発達相談環境を整えた。入園選考時にも適切なアドバイスを受けることができた。
- 6) 学部生・院生のボランティアにより園外保育援助や園行事の充実を図った。
- 7) 幼小中12年間の学びの連続性を重視し，附属三校園の交流活動や情報交換を行い連携を深めた。

d 近隣の幼稚園・保育所との連携

- 1) 上越市学校教育研究会幼稚園部会との共催で、本学講師の白神敬介先生を講師として「遊び込む子どもたち」という演題で講演会を実施した(11月11日)。上越地区の幼稚園・保育所から45人の参加があった。具体的な事例をもとに「遊び込む」ことの理論的背景や、環境へのまなざし、幼児にとっての豊かな表現とは何かということを生態心理学の側面から講演していただいた。

ウ 優れた点及び今後の検討課題等

i) 教育研究・管理運営の状況の視点から

a 教育実習の受入れについて

附属校として質の高い教育実習指導を行うことができ、今年度の反省点をもとにさらに改善に努める。

b 大学教員との共同研究等の推進について

幼児期の仲間関係の発達や英語活動、特別支援教育等についての実践的研究を継続して推進する。

ii) 附属幼稚園の定員充足等の視点から

a 園の積極的なPR活動等

附属三校園のパンフレット作成・配布等により、附属校の質の高い教育について今後も積極的にPRする。

園庭開放を毎週実施したこと(年間31回)が入園志願者数の増加につながる可能性もあると思われるので、今後も内容をさらに検討しながら実施していきたい。

春から夏にかけて、園開放デーを月1回継続して実施することにより、未就園児を定期的に園に呼び込めるのではないかと考える。4月から8月にかけて、毎月1回の園内開放デーを実施し、園の自然や魅力を発信することに努めてきた。

b 食育等特色ある教育活動の推進

現代の幼児期の教育課題を踏まえ、野菜の栽培活動を通じた食育、仲間とかかわる中で協調性や社会性を表現する力等を育み小学校への円滑な接続を図る保育、年間にわたる英語活動を教育課程に位置付け、特色ある教育活動を計画的に推進する。また、園に接する森(緑の小道)のさらなる有効活用を探り、こども広場周辺の幼児が立ち入れる道の拡充や自然活用遊具の改善を試みたい。

c 附属幼稚園改革検討部会における検討

附属幼稚園改革検討部会において、園児充足に向け預かり保育の実施に向け、多様な側面から検討を行った。関係者や関係機関の協力を得ながら課題を一つ一つ解決し、昨年度と今年度の試行を経て、来年度より本格的に導入、実施していく。